

仙台商工会議所 会頭
(株)七十七銀行 会長

かま た ひろし
鎌 田 宏 氏

特集／新春特別対談

東北の未来を 切り拓く

仙台市出身グローバル企業のリーダーに聞く



未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、およそ1年10カ月。

被災地からは震災直後の混乱が去ったものの、復興への歩みがまだ本格化していない地区が多く、思うように進まぬ復旧・復興を、スピード感を持っていかに進捗させていくかが、大きな課題となっています。

復興と産業振興を有機的に結びつけ、都市活力に繋げるには、何が必要なのでしょう。

新春号では、仙台出身で、世界規模で活躍されているサツポロホールディングス(株)の上條社長をお招きし、「東北の未来を切り拓くためになすべきこと」について、当所鎌田会頭と意見交換をしていただきました。

(対談日…2012年11月27日)

様々な形で展開される 東北の復興支援活動

進行 東日本大震災から間もなく2年を迎えようとしている今、仙台・宮城、そして東北の復興状況について、率直なご感想をお聞かせください。

鎌田 まず始めに、震災直後から御社には沿岸部被災地への支援物資の提供をはじめ、炊き出し、避難所の提供、義援金の寄付など、直接的なご支援をいただき、ありがとうございます。また東北六魂祭のスポンサー、各種イベントへの参画・支援を通じて、東北の復興を支援していただいていることに、改めまして御礼申し上げます。

サッポロホールディングス(株)
代表取締役社長兼グループCEO

かみ じょう つとむ
上 條 努 氏

昭和29年1月6日生まれ。仙台市出身。
仙台第二高等学校から慶應義塾大学法学部に進学。昭和51年大学卒業後、サッポロビール入社。入社9年目にサンフランシスコ支店長となり、米国でサッポロビールを日本ビールのナンバーワンに。その後、営業企画部長、取締役兼常務執行役員、サッポロホールディングス取締役などを経て平成23年3月30日より現職。



これまで、私たちは「東北の復興なくして、仙台の復興はない」、そして「単なる復旧ではなく復興を果たさなければならぬ」という姿勢で、被災企業が抱える課題の解決を国に要望してまいりました。

国も様々な支援策を打ち出しましたが、施策の実行者である地方自治体での人材不足、復興のための工事を行う人材の不足、さらに資材不足も相まって、被災地の復旧・復興が思うように進んでいないというのが現状ではないかと思えます。
進行 次に上條社長におうかがいします。ご自身と仙台との関わり、震災の時の状況などについて教えてください。

上條 私は生まれも育ちも仙台です。残念ながら仙台での勤務経験はありませんが、高校卒業まで仙台におりました。高校時代は軟式野球部で、秋には稲刈りが終わった田んぼで野球をやったり、イナゴを捕まえて祖母を喜ばせたりしたものです。実は家内も仙台の人間でして、今でも自宅は仙台にあり、私は単身生活を18年間続けています。

震災は、私が社長になる3週間ほど前に起きました。その時、私は東京におりまして、テレビに映し出される映像を見ても、現実起こっていることとは信じがたく、何が起きているのかまるでわかりませんでした。

また、私どもの名取にある仙台工場は、昭和53年の宮城県沖地震の教訓を生かし、十分に備えができていたものと思いましたが、千年に一度といわれるような地震ではその影響も大きく、結局、商品の供給体制は秋になるまでは震災前の状況に戻らず、お客様には本当に迷惑をおかけしました。



鎌田 震災時、サッポロビール仙台工場では、地域の方々に避難場所を提供されたり、炊き出しをされていましたね。

上條 はい。仙台工場にはビール園があり、弊社グループの外食事業であるライオンが営業していたものですから、食材が残っていて、なおかつプロパンガスを使っていたので、すぐに温かい食べ物をご提供できる環境にあったのです。現場にいる人間が今、何をしなければならぬのかを自ら判断し、行動して住民の方と苦楽をともにできたことは、大変うれしいことでしたし、よく気がついて迅速に動いてくれたと感激しました。

上條 一つは震災で失ったSENDAI光のページェントの電球、約4万球相当を寄付させていただいたこと。また、女川町と岩手県の大槌町の小学生から高校生までの子どもたちが勉強できる環境を整える目的で、放課後に勉強する機会や場所を提供している「コラボ・スクール」という取り組みがあるので、その活動を支援させていただいていることです。そのため、東京で毎年9月に開催している、恵比寿麦酒祭（エビスビールまつり）に来場された皆さんにビールをおいしく楽しく飲んでいただいた代金を全額寄付させていただいています。

それからサッポロビール東北本部では、私たちが契約する岩手県・青森県の畑で収穫されたホップを使い、2009年より「サッポロ生ビール黒ラベル東北ホップ100%」を、2010年からは「麦と東北ホップ」を発売し、本年も東北地区で限定販売いたしました。また、東北の夏祭りの魅力を伝えるために、10カ所の夏祭りをデザインした「東北夏祭り缶」を東北限定発売し、東北エリアの観光支援のため旅行券が当たるキャンペーンを実施させていただきました。

変化する要望に 応えられる支援を

進行 今後の震災復興のための支援策についてお聞かせください。

鎌田 企業の復旧・復興に力を発揮してきたものにグループ補助金がありましたが、予算が不足して1次から5次までの採択率は、希望額の32.3%にとどまっています。基本的にはこの制度は大変良いものであると思うので、制度の継続はもちろん、予算の拡充と使い勝手の良い制度への見直しを訴え、企業の復旧・復興に弾みをつけたいと考えています。

また当所では25年度から3カ年の中期ビジョンを策定し、東北における牽引力と発信力をさらに高めていくことにしています。中心となるのは、震災によって失われた販路の確保、拡大のための活動支援で、日本商工会議所（以下、日商）や全国514商工会議所のネットワークを生かし、販路を確保するための仕組みをどのように構築すれば良いのかを研究しているところです。

さらに復興庁が設けている「結（ゆい）の場」という大手企業の支援と被災企業のニーズとを商工会議所が間に立ってマッチングさせるモデル事業がスタートしました。その第一弾は石巻の企業

なのですが、被災規模の大きい石巻から他地域にこのモデルを広げていけるよう、力を入れていきたいと思っています。

交流人口の拡大については25年4月から6月に、仙台・宮城・アスティネーションキャンペーンが開催されますので、できるだけたくさんの方にお越しいただき、仙台・宮城にとどまらず被災地である岩手や福島にも足を伸ばしていただけるよう努力をしたいと思います。また御社にもご協賛いただきました東北六魂祭ですが、25年は福島で開催することが決まりましたので、交流人口を増やす一つのきっかけになればと考えています。

上條 東北の元気のために、私たちにできることを考え、実践する「東北未来プロジェクト」を中心に、現場の皆さんのご期待に応えられるような支援を続けたいと思っています。

先日、女川の「コラボ・スクール」を訪ねたのですが、その中に大学に進学するという女の子がいて、その生徒さんが鎌田会頭と私の母校でもある慶應義塾大学に推薦入試での合格が決まったと教えてくれました。お父さんを震災の直前に亡くし、お母さんが津波で亡くなるという環境の中で、周囲の人たちを常に気遣っていた生徒さんなのだそうです。その精神力たるや、すごいものがあります。しかし、きつと今もあの3月11日から心は張りつめたままの状態ではないか



と思うのです。そんな精神力で頑張っている子どもたちを、これからもずっと守っていきたくて強く思われました。これから先、時間の経過と共に、被災地からの要請は変化していくと思いますが、その変化に応じて、必要なものは何かということも、ご相談させていただきながら進めるのが良い方法だと思います。震災復興には長い時間がかかるでしょう。ですから、私たち大人が継続する意志を子どもたちに見せることが必要なのだと思います。

鎌田 その通りですね。私たちも日商と全国の商工会議所のネットワークを通じて設備機器等が震災の影響で破損、流失してしまい、操業できない事業所に対

して、無償で工作機械を提供する「遊休機械無償マッチング支援プロジェクト」や、大学で保有している使わなくなったパソコンを再生した上で、無償で提供する「再生PC寄贈プロジェクト」などの支援を行っています。今後は、ご提供いただいた機械がどのように活用されているかについて、提供してくださった方々にご報告することで、被災地及び被災企業への理解をさらに深めていただき、継続的に支援していただくよう努めていかなければいけないと思っています。また、大きな課題である販路拡大に関しても、このネットワークを活用し、知恵を出し合いながら支援の輪が広がっていくよう進めてまいりたいと思います。

東北経済を切り拓く 仙台の動向

進行 グローバル企業の視点から、東北経済の発展に必要なものについてのお考えをお聞かせいただけますか。

上條 今回の震災について事実を把握し、認識したいというのは、国内だけのことではなく、海外の方も同じだと思います。それは、事実の公表ということか

もしれません。原発に関しては非常に難しい問題ですが、事実としての成果なり、復興が進んでいる状況は伝えていくことが大事だと思います。

私たちにとつて、海に隔てられた外国は、アジア圏であっても遠くに感じられるかもしれませんが、実は東京からシンガポールの距離は、アメリカでいえば西海岸から東海岸までの距離と同じくらいです。ですから将来的にはアジア圏を包括した範囲の経済圏で考えればいいですし、その中であつて、仙台には物流の拠点としての仙台港及び仙台空港がありますので、あらゆる産業の発展に大きな期待がもてるのではないかと考えています。仙台が東北経済を牽引すること、東北の明日が切り拓かれる。仙台は東北の顔、核であり続ける責任があると思います。子どもたちに範を示す意味でも、意欲をもって自分たちが生きて、やるべきことをやり続けることが大切ではないでしょうか。東北には、その力があると私は確信しています。

次世代に繋がる 震災復興支援

進行 最後に平成25年度、仙台が歩むべき方向性を示す「キーワード」は、どんな言葉になるとお考えでしょうか。

鎌田 24年は「復興元年」をスローガ

ンに歩んでまいりましたが、当初は何をどうすれば良いのか、皆目見当がつかない状態からの出発でしたので、復興に関しては望んだスピード感が得られませんでした。そこで、この1年を通じて培ったノウハウを復興の加速力に換えて、25年は少しでも前進させるべく「復興促進」をキーワードにしたいと思います。

上條 次世代にもつながっていくような考え方で、復興というものをとらえなければ、納得性の高い復興を遂げることは難しいのではないかと感じています。そこで大切になるのが、継続する力や意欲が欠けないように、日本人全員が意識することではないでしょうか。従つて、キーワードは「継続」。みんなの力をつなぎ合わせ、未来に向かって歩み続けることが重要と感じます。

進行 本日はありがとうございました。

